新富町文化財調査報告書　第 30 集

祇園原古墳群 3

国指定史跡「新田原古墳群」史跡整備にともなう発掘調査概要報告書(3)

２０００

新富町教育委員会

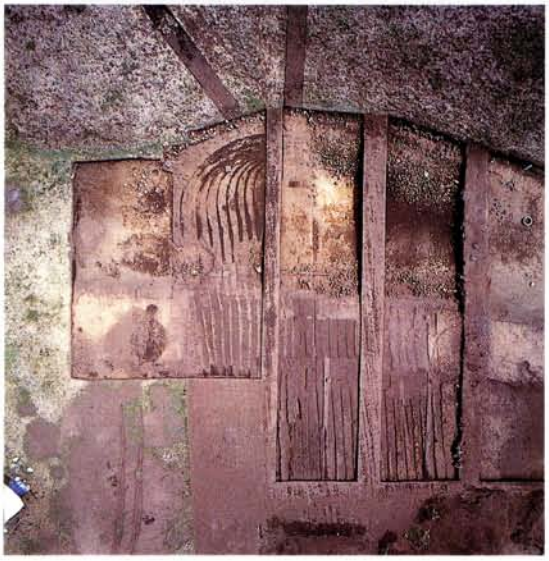
1．百足塚古墳

2．伝新田原52号墳出土単龍環頭

図版2

1．百足塚古墳

2．百足塚古墳（西から）



3．百足塚古墳調査Ⅱ区

4．Ⅱ区（南から）

5．女性埴輪

6．鳥形埴輪

7．柵形埴輪

序

宮崎県の一ツ瀬川流域には数多くの古墳群があることで有名です。そのなかでも本町の祇園原古墳群は、宮崎県における古墳時代後期最大の首長墓群です。

町ではこの重要な史跡を後世にわたって保存するため史跡整備計画を立案し、平成９年度から発掘調査をすすめています。

具体的な整備手法は未定ですが、実施計画の策定に向け数年間の発掘調査を行う予定です。本年度は昨年度から開始した百足塚古墳の発掘調査の３年目になります。すでに調査で検出された大量の形象埴輪は宮崎県で希有な例として高い評価を受けています。

これら多くの出土遺物は今後の史跡整備で活用し、文化財保護の啓発や広く生涯学習の場に寄与させようと考えています。

最後になりましたが、関係者の方々には調査に際して多くのご助言やご協力を頂きました。この場をかりて御礼申し上げます。

平成12年３月

新富町教育委員会
教育長　　清　　郁　　雄

例　　言

1．本書は平成11年度に行った宮崎県児湯郡新富町に所在する新田原古墳群の史跡整備におもなう発掘調査の概要報告書である。
2．発掘調査は「新田原古墳群記念物保存修理・一般」事業として文化庁の国庫補助金を受け、宮崎県文化課及び新田原古墳群史跡整備専門検討委員の指導のもと、新富町教育委員会がおこなった。
3．国指定史跡「新田原古墳群」は町内に分布する大字新田地区に点在する古墳の総称で、実際は４つの別個の古墳群と判断できるため、それぞれ塚原古墳群、石船古墳群、山之坊古墳群、祇園原古墳群と呼んでいる。
　今回の整備計画は祇園原古墳群が対象である。
4．本書の執筆・編集は有馬が行った。
5．本書で仕様する方位は座標北と磁北である。レベルは海抜絶対高である。
6．本書で使用した地図のうち、第１図・第２図は建設省国土地理院発行の２万５千分の１図をもとに作成し、ほかは平板測量にて作図した。
7．調査で出土した遺物と作成した図面等はすべて新富町社会教育課で一括保管している。

本 文 目 次

Ⅰ．位置と古墳群の概要
1．一ツ瀬川中流域の古墳分布とその特徴 …… 1～3
2．祇園原古墳群の概要 …… 4～5

Ⅱ．発掘調査の経緯
1．整備までの経緯 …… 6
2．短期整備計画と発掘調査 …… 6～7
3．調査体制とこれまでの調査経過 …… 8

Ⅲ．平成11年度の調査概要
1．事業の概要 …… 9
2．百足塚古墳Ⅱ区の調査 …… 9～11
2．百足塚古墳の形象埴輪の整理 …… 12～13
3．祇園原古墳群の円筒埴輪 …… 14～17
4．伝新田原52号墳出土の単龍環頭 …… 18～20

Ⅳ．まとめ …… 20

Ⅰ．位置と概要

1．一ツ瀬川流域の古墳分布とその特徴

古墳群の立地

一ツ瀬川は九州山地に源をもち、宮崎県のほぼ中心部を北西から南東へ蛇行しつつ、日向灘へ流れ入る二級河川である。その中流域は三納川・三財川等の小河川と合流し、台地の端部に幾つもの開析谷を形成し、広い平野部を有している。特に標高60～130mの洪積台地は長い年月に渡る断続的な隆起と浸食によって形成された広い平坦面で、俗に「～原（ばる）」と呼ばれることが多い。

この原から沖積平野部にかけての一帯は宮崎県最大の古墳密集地で、高塚墳が約800基確認でき、宮崎県内の古墳総数の約半数に及ぶ。特に前方後円墳は71基にのぼり、県内の前方後円墳総数169基の約４割にあたる[1]。

以下では前方後円墳を中心に、墳形と採集される遺物から考えられる古墳の築造時期の概要をまとめる。

前　期

右岸の西都原台地では少なくとも６つの首長墓系譜が同時期に継続して築造されており、いくつかの集団が墓域を共有していたことが想定されている[2]。また左岸の茶臼原古墳群に２基、祇園原古墳群に２基、山之坊古墳群に６基、塚原古墳群に２基、三納川流域の百塚原古墳群に１基、三財川流域の下三財古墳群に５基など、ほとんどの流域・支流域の台地上に首長墓系譜が認められ、宮崎県域最大の密集度が認められる。

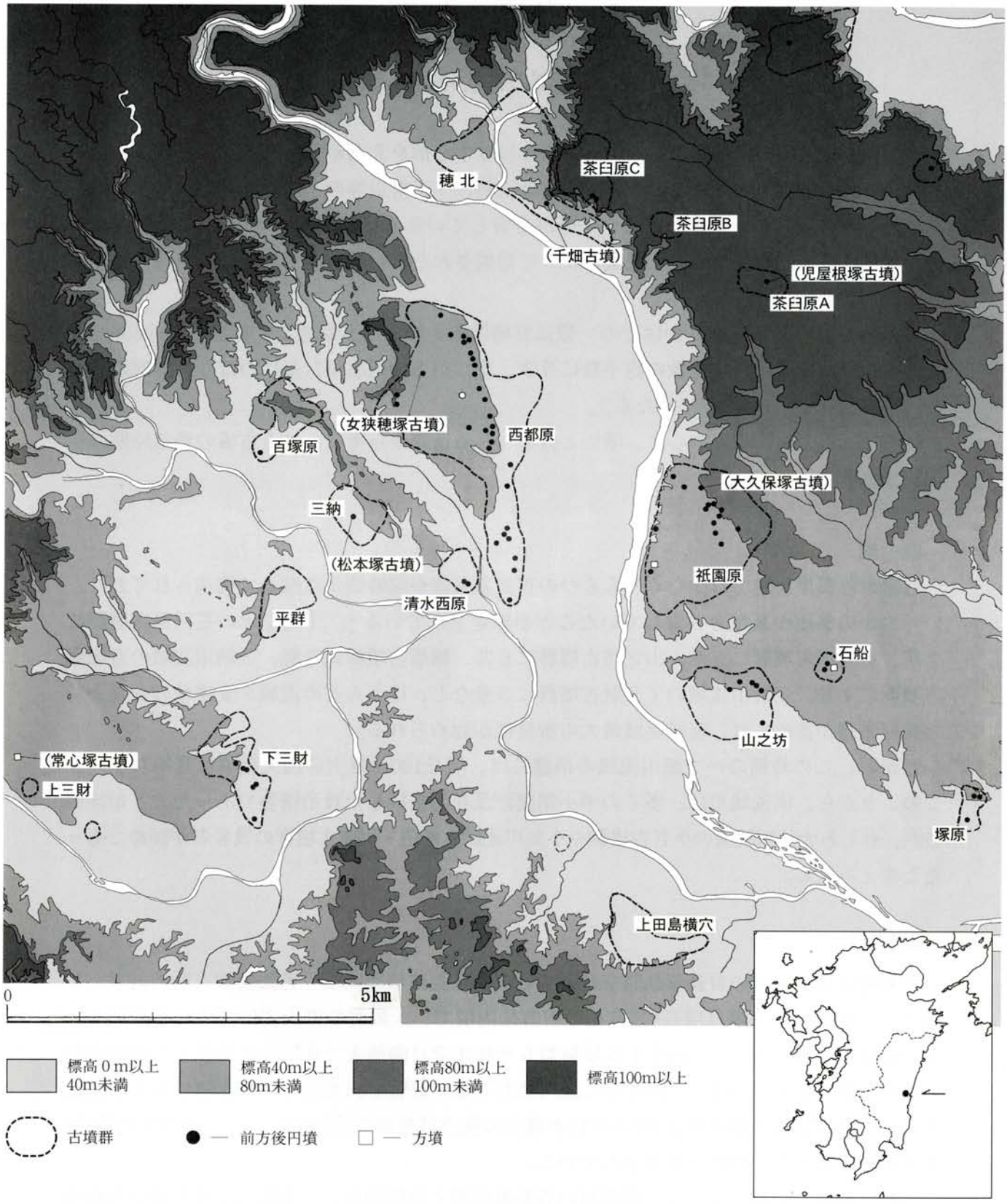
しかし、この時期の一ツ瀬川流域の系譜には、墳丘100m以上の超大型墳は登場しない。このことから、同流域では、多くの中小集団が混在し拮抗した政治情勢であったことが推測され、むしろ大淀川流域の生目古墳群や小丸川流域の持田・川南古墳群の被葬者が優勢であったと考えられる。

中　期

西都原台地の６つの首長墓系譜を統合するように女狭穂塚古墳・男狭穂塚古墳の両墳が登場する。女狭穂塚古墳は墳長約177mの前方後円墳で、大阪府仲津山古墳と同一平面形で、その約６割規模を有し[3]、出土する埴輪類もそれまで日向地方で採用されなかった畿内通有の技法で製作されている[4]。おそらく畿内勢力の強い影響下に築造された古墳であると想定される。男狭穂塚古墳は墳長167mの日本最大の帆立貝型前方後円墳ないし、造出付円墳で、女狭穂塚古墳と近い時期に築造されている。

これら両墳の登場によって、同流域の首長墓の多くは断絶ないし規模の縮小を強いられたようである。それは日向地方の他流域の首長墓系譜についても同様であるため、両古墳の被葬者が日向地方の首長を統括する盟主的首長になったと考えられる。

しかし両墳の築造後、西都原台地上に前方後円墳が継続して築造されることはなかったようだ。今のところ直後の前方後円墳は、墓域を異にした一ツ瀬川左岸流域の児屋根塚古墳・



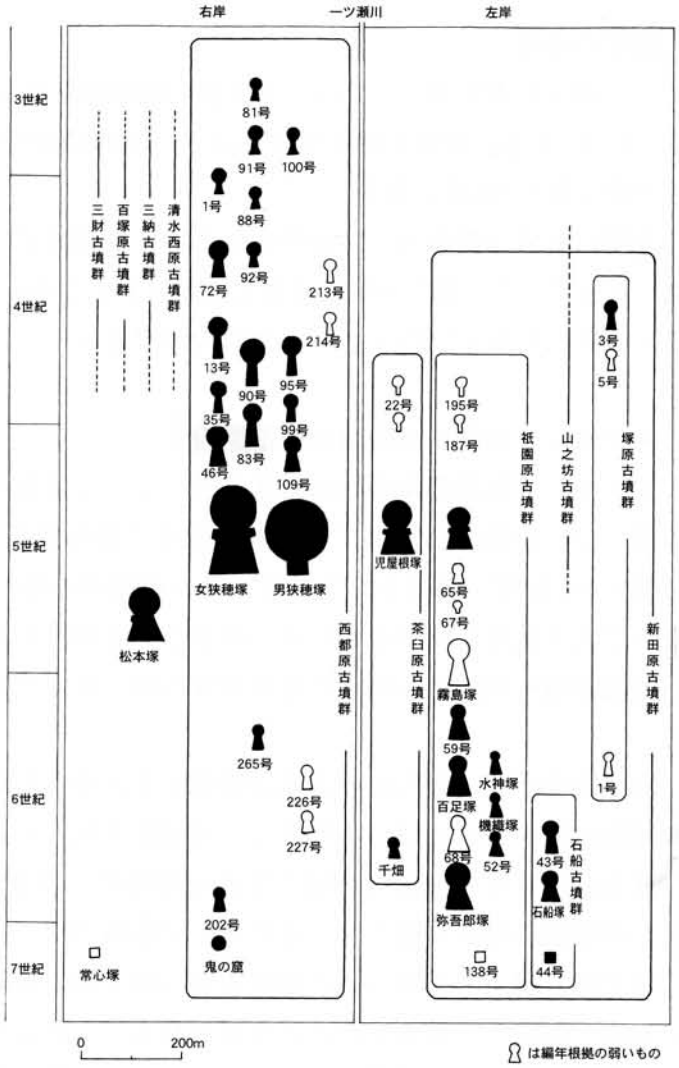
第1図　一ツ瀬川中流域の古墳群

大久保塚古墳の両墳があげられる。これらはその墳丘形態や表採される埴輪が女狭穂塚古墳と類似し、近い時期の築造が予想される。

また、これらの古墳にも継続した古墳が周囲に認められず、５世紀末になって三納川流域に松本塚古墳が登場することから、中期の同流域の政治情勢は非常に不安定であったと推測される。

この時期、宮崎平野部にも南九州で顕著な墓制である地下式横穴が登場する。一ツ瀬川流域では前方後円墳が築造停止した西都原古墳群で出現する。

表１　一ツ瀬川流域の古墳編年（柳沢1999を一部改変）



後　期

松本塚古墳築造後、５世紀から６世紀初頭の前方後円墳はよくわからない。やや時期をおいて６世紀前半までには、左岸流域の祇園原古墳群で継続した首長墓系譜が築造されるようになる。この古墳群の概要はのちに述べるが、おそらく大規模墳と中規模墳が同じ墓域に併行して築造され、互いに階層構造型の群構造を示し、７世紀まで継続する古墳群であろう。

一方、右岸の西都原台地では前方後円墳築造の空白期を経て、６世紀後半に２基の前方後円墳が場所を隔てて造られている。同様に左岸の石船古墳群、塚原古墳群、千畑古墳、三納川流域の清水製西原古墳群などで前方後円墳が築造されている。いずれも50～60m規模で、１～２基に終始するため、祇園原古墳群の首長墓系譜には規模・数ともに及ばない。

これら前方後円墳の築造後、各首長墓系譜は墳形を大型の円墳や方墳に変更する。６世紀末から７世紀前半のことである。前者例では西都原古墳群の鬼ノ窟古墳があり、後者に石船古墳群の44号墳、祇園原古墳群の138号墳、常心塚古墳などがある。

その後、列島的に墓制によって身分秩序を表現する時代は終わりを告げるが、流域の首長層がどのように畿内政権を中心とした律令体制の枠組みに参画したか判然としていない。ただ、後に日向国衙や国分寺などが西都原台地に設置されるのは、前期から小首長が混在し、彼らの統括する領域の広かったことや、女狭穂塚古墳の造営に象徴されるように、畿内政権の影響力が強かったことなどが起因しているのではないだろうか。

2．祇園原古墳群の概要

古墳の分布

一ツ瀬川左岸台地上にあり、154基の高塚墳がある。その内訳は前方後円墳14基、方墳１基、円墳138基、墳形不明１基であるが、発掘調査で検出された円墳の周溝が38基あるので、その数は現在192基になる[5]。

古墳分布域は標高70～90mの台地上で、西側直下には一ツ瀬川が流れ、東は一段高い台地面になっている。また台地には南北に貫入する２本の谷があり、古墳群はこれら谷地形によって区分されたＡ～Ｄの４グループに大別できる。

Ａグループの前方後円墳の築造過程

Ａグループは東側傾斜面を南北につらなって築造された12基の前方後円墳が中心である。前期には、台地北西端部に前方部が低平で後円部径に対して狭長な前方後円墳が２基（187号墳・195号墳）築造されている。その後同形の前方後円墳は継続しないが、５世紀中頃になって大久保塚古墳が造られる。採集される埴輪や墳形は、先述のように西都原古墳群の女狭穂塚古墳や茶臼原古墳群の児屋根塚古墳に類似するため、近接する時期の築造と推測される。

５世紀後半には大久保塚古墳に継続する古墳はみあたらないが、今後の調査で中小規模墳の築造時期がわかれば、古墳築造の連続性を明らかにできる可能性もある。

６世紀になると前方後円墳の築造は爆発的に増加し、墳長60～100mの大型墳と墳長60m以下の中規模墳が築造され、その多くで埴輪が樹立されている。この埴輪の検討から、前者は百足塚古墳→59号墳→弥吾郎塚古墳→68号墳と連続し、後者は水神塚古墳→機織塚古墳→52号墳と連続して築造されたと予想される。これら大規模墳と中規模墳は併行して築造された可能性が高く、古墳群全体としては中小の円墳を含めた階層構成型の群構造であると考えられる[6]。

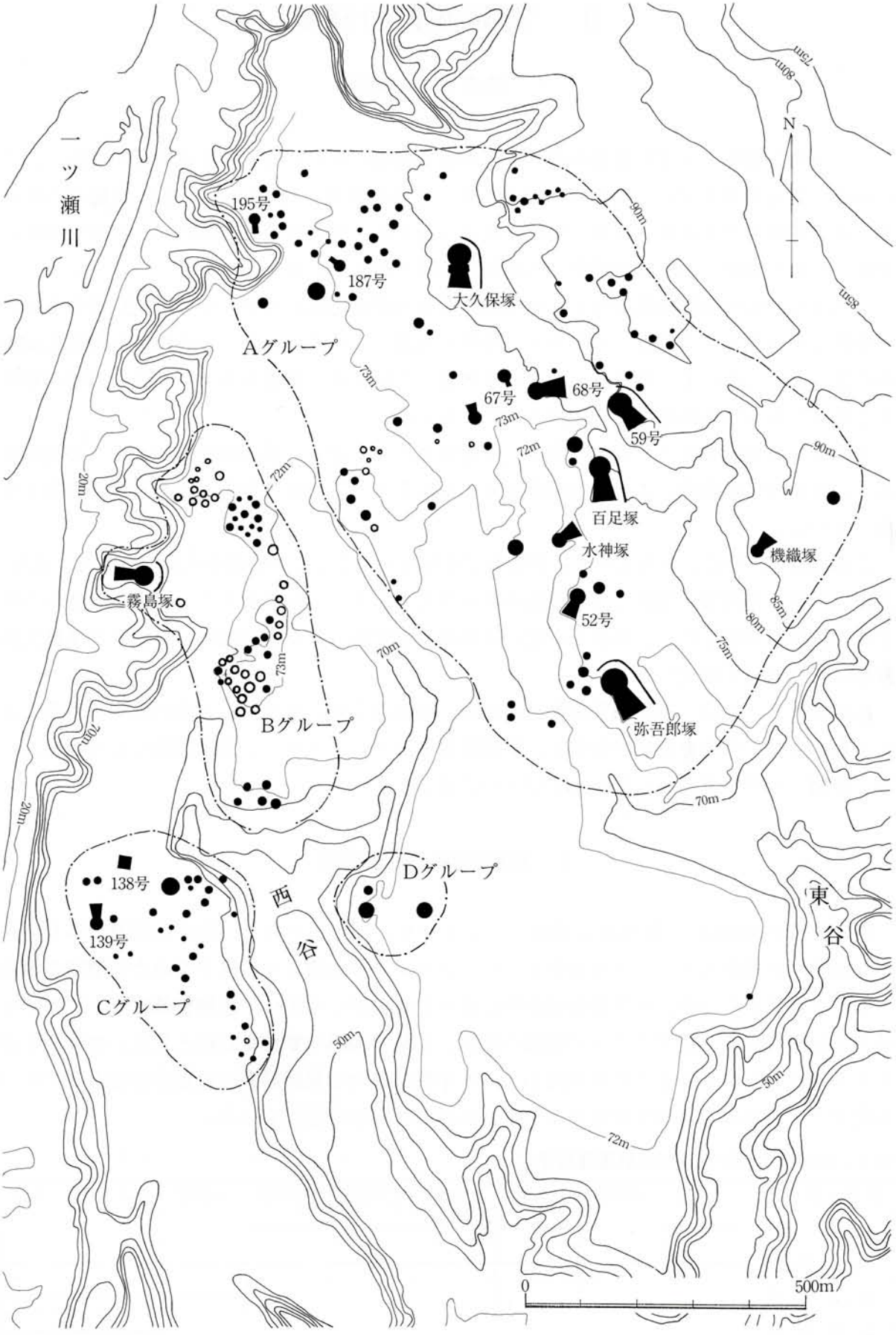
Ｂグループの群集墳

Ｂ・Ｃグループは前方後円墳をそれぞれ１基づつ含む後期群集墳である。特にＢグループではほ場整備にともなう調査で36基の消滅墳が検出され、周溝に掘られた二次的埋葬施設と考えられる地下式横穴が５基検出され、近接して４基の馬の埋葬土壙もあった。

これら群集墳の築造は、出土した須恵器を検討すると、TK10型式併行期に始まり、MT85型式をピークに隼上りⅡ型式まで継続する[7]。

Ｃグループの首長墓系譜

Ｂグループの霧島塚古墳は時期不明のため詳細不明だが、Ｃグループは前方後円墳の139号墳ののち、140号墳（円墳）・138号墳（方墳）と続く終末基の一首長墓系譜であり、石船古墳群のように６世紀後半になって派生新出したものと考えられる。祇園原古墳群はこれらの首長墓群を中心に、小円墳が築造され、結果、大古墳群を形成したようだ。



第２図　祇園原古墳群の古墳分布

Ⅱ．発掘調査の経緯

1．整備までの経緯

「新田原古墳群」とは児湯郡新富町から西都市右松にかけて分布する古墳群の総称で、昭和19年に指定措置を受けた国指定史跡である。その分布域は東西4.5km、南北4.5kmの台地面から沖積平野部であるが、分布の集中する４つのグループに大別できるため、東から塚原古墳群、石船古墳群、山之坊古墳群、祇園原古墳群と呼んでいる。

このうち石船古墳群は昭和16年の陸軍基地建設の際に消滅したが、他の指定措置をうけた古墳群は町有地として買収されており、管理・保護している。しかし公有化された墳丘は保護対象でありながらも、その他に存在する埋没した周溝や、古墳を取り巻く築造当時の地形など重要な考古学的情報は十分把握されていない。

このような状況のもと、指定措置から半世紀以上が経過し、建造物が古墳どうしの視界を遮り、農地のほ場整備によって旧地形が変化するなど、古墳を取り巻く周辺環境が大きく変化している。

これに対し、町では平成元年度に管理策定書を刊行するなどの施策を実行してきた。また、平成４年度に祇園原古墳群でほ場整備が計画されたのをきっかけとして、平成７年度から指定地の追加と買収を行い、平成８年度には積極的な史跡の活用を目的に「新田原古墳群史跡整備基本計画」を策定した。

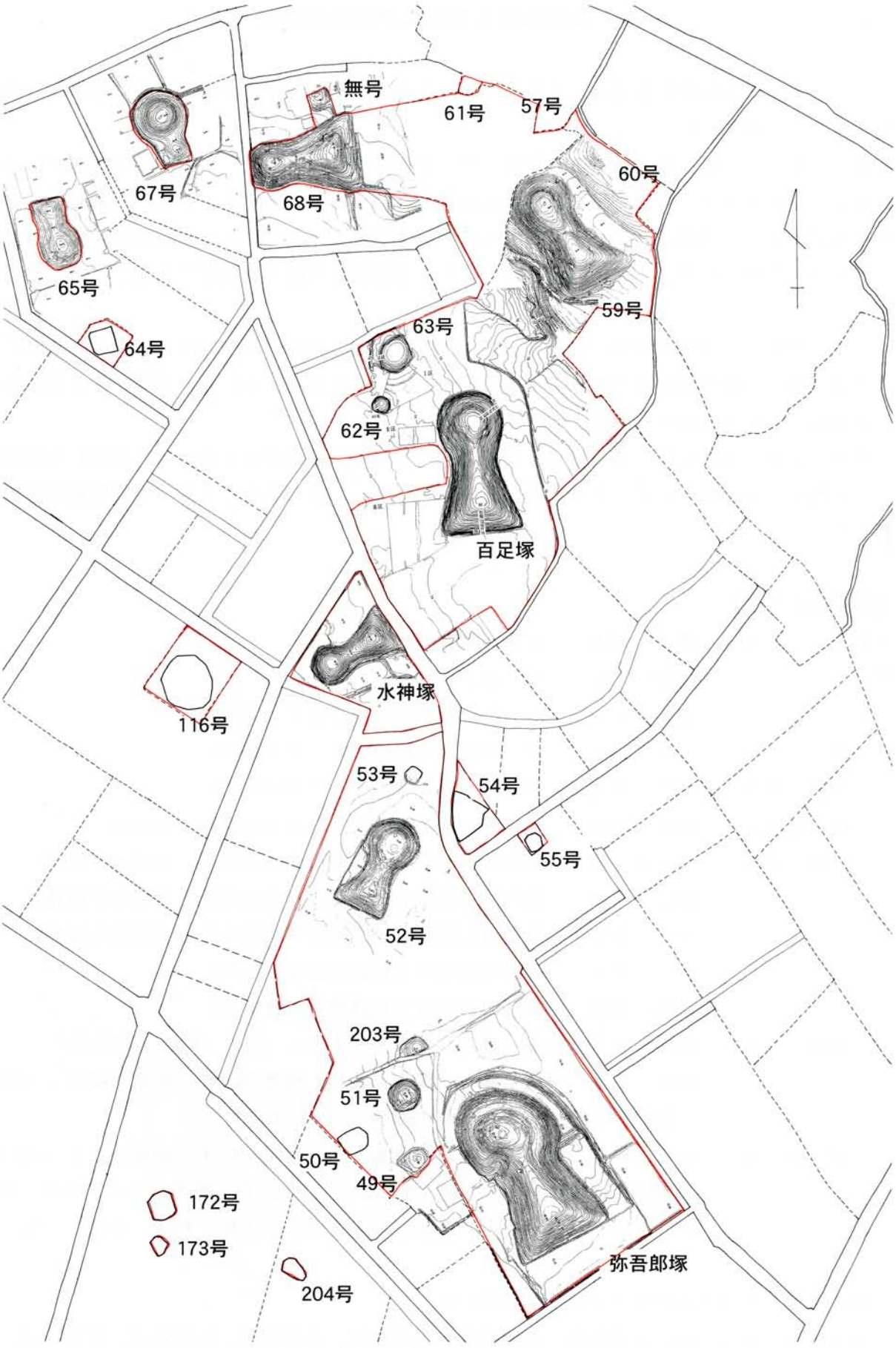
基本計画としては「古墳の保存整備と同時に畑地のなかに点在する古墳の風景をさらに良好なものとし、歴史と自然が融合した景観整備を行う」こととし、対象面積が広大であるため、短期・中期・長期からなる30年以上の計画とした[8]。

2．短期整備と発掘調査

短期整備の範囲は、「新田原古墳群」のなかでも公有化率が高く、前方後円墳が多く分布する祇園原古墳群Ａグループを対象とした。Ａグループは墳丘や周溝を含めた古墳間が連続して町有地であるため、見学者の利便性にあった整備がしやすい。短期整備では、①主要な前方後円墳の復元、②ガイダンス施設の設置、③見学園路の整備を目的とした。整備年次は平成９年度から17年度までの９年間とし、６年間にわたる発掘調査で百足塚古墳と59号墳の基礎データを整理し、墳丘復元やガイダンスでの展示を予定している。

表２　新田原古墳群短期整備計画進行予定

事業内容/年次	９年度	10年度	11年度	12年度	13年度	14年度	15年度	16年度	17年度
公　有　化									
発掘調査									
復元工事									
施設整備									
環境整備									



第３図　祇園原古墳群の短期整備計画区域（１/3,000）

3．調査体制とこれまでの調査経過

発掘調査は新富町教育委員会が主体となり、県文化課及び新田原古墳群史跡整備専門整備検討委員会の指導のもと行った。

調査対象は百足塚古墳（新田原58号墳）で、平成９年度から調査している。百足塚古墳は祇園原古墳群Ａグループで南北に展開する前方後円墳群の中間の位置にある。平成５年度の墳丘測量調査で、墳長76.4m、後円部径32m、前方部幅43.6m、クビレ部幅38mを測り、前方部をほぼ正南に向け、周囲に盾形周溝を有する２段築成の前方後円墳であることが判明していた。

平成９年度には百足塚古墳に近接する62・63号墳の周溝の位置を把握する調査区（Ⅰ区）、百足塚古墳後円部西側周溝を確認する調査区（Ⅱ区）を調査し、それぞれ周溝とそこに転落した埴輪片・弥生中期の住居址３軒を検出した。

平成10年度には百足塚古墳前方部西側周溝と前方部隅角を検出する調査区（Ⅲ区）を設定し、周溝と外堤外側からもともと外堤に配置されていたと推測される大量の形象埴輪片が検出できた。

【発掘調査体制】

○総　　括	清　郁雄	（新富町教育委員会教育長）
	図師　勉	（同　社会教育課長）
	富田　次男	（同　社会教育課長補佐兼社会教育係長）
○庶　　務	山崎　和子	（同　社会教育課副主幹　庶務担当）
○調整・調査	有馬　義人	（同　社会教育課主事　文化財担当）
○調査補助員	新森　美穂	（同　社会教育課嘱託　埋蔵文化財調査補助員）
○指導・協力	小田富士雄	（新田原古墳群史跡整備専門検討委員：福岡大学教授）
	柳沢　一男	（新田原古墳群史跡整備専門検討委員：宮崎大学教授）
	森本　幸裕	（新田原古墳群史跡整備専門検討委員：大阪府大教授）
	重山　郁子	（宮崎県教育庁文化課埋蔵文化財係）
	松林　豊樹	（宮崎県教育庁文化課埋蔵文化財係）
○参加　学生	芝原　知行、杉岡　栄治（以上天理大学）、古屋　美樹（別府大学）	
	松野　圭太、河畑　健一、黒木　誠也、樋渡将太郎、師富　国博、当房　祐理、宮崎　恵一、藤原　理恵（以上宮崎大学）	
○作　業　員	小守　容子、大原　一彦、杉尾美千子、日野　仁美、野尻　富子、滝口　則雄、滝口恵美子、日野　君代、岩下ヨシ子、新恵トシ子、出井　クニ、江口　栄子、河野　隆子、長友　幸枝、寺原　利雄、岩本　栄	

調査に際しては下記の方々にご助言を頂いた。

塚本敏夫、古谷　毅、吉田和彦、高橋克壽、大塚初重、吉留秀敏、肱岡隆夫、渡辺　誠、堀田孝博、若松良一、高島忠平、犬木　努、山中　章（敬称略）

Ⅲ. 平成11年度の調査

1. 事業の概要

昨年度までに、百足塚古墳の形象埴輪の豊富な内容とその想定される樹立箇所が調査でき、専門検討委員会と町教育委員会での協議の結果、これらの資料を整備のメインとすることで了解された。そこで、形象埴輪樹立の範囲を確認するため、Ⅱ区とⅢ区を拡張し、西側周溝を全面調査することとなった。

本年度の調査としては下記のような事業を行った。

① 百足塚古墳Ⅲ区の遺構実測
② 百足塚古墳Ⅰ区の遺構埋設
③ 百足塚古墳Ⅱ区の拡張遺構検出
④ 百足塚古墳現地説明会
⑤ 形象埴輪の整理作業

また、祇園原古墳群を理解するための補足調査として次の調査を行った。

⑥ 祇園原古墳群の円筒埴輪の整理
⑦ 伝新田原52号墳出土の単龍環頭の実測

それぞれの作業工程は表３のとおりである。

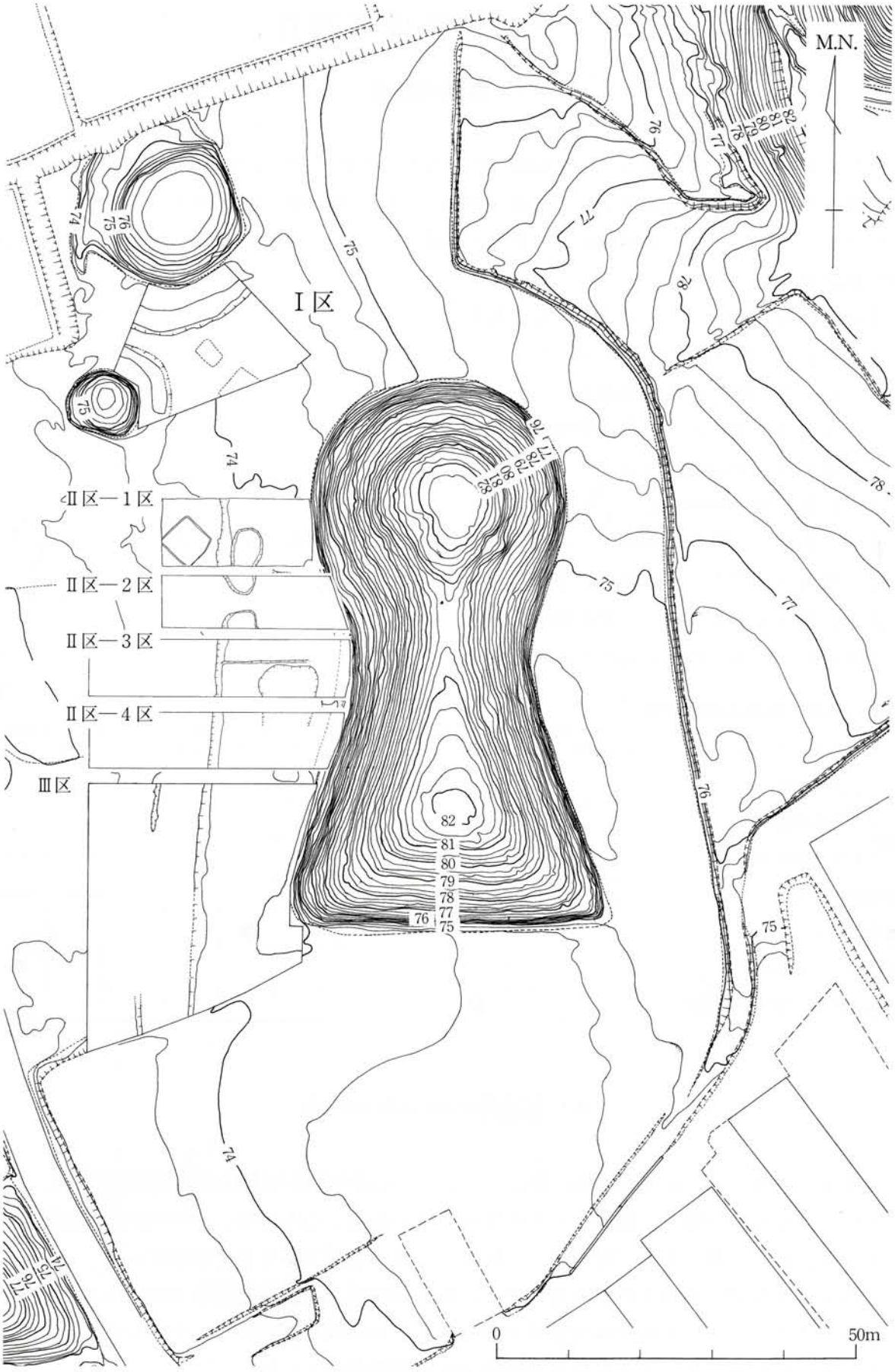
表３　平成11年度の事業概要

事業内容／月		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
発掘	Ⅱ区の拡張												
	Ⅰ区の遺構埋設												
	Ⅲ区の遺構実測												
形象埴輪の復元													
現地説明会									●				
古墳群の円筒埴輪整理													●
伝新田原52号墳環頭の実測					●								

2. 百足塚古墳Ⅱ区の調査

昨年度の調査では、前方部西側に設定したⅢ区の周溝内外から大量の形象埴輪が出土した。これら形象埴輪は外堤上に配置された形象埴輪群が転落したもので、その内容は現在整理中であるが、家・人物・鳥など南九州でも類例の少ない資料であることがわかった。

新田原古墳群史跡整備専門検討委員会での検討の結果、町教育委員会ではこれら形象埴輪を整備のメインとし、史跡整備の重要な資料とし、本年度の調査としてその全容を把握するためにⅡ区を拡張しⅢ区までを含めた周溝全体を調査対象とした。



第4図　百足塚古墳の調査区

(1) 調査の方法

Ⅱ区を南に拡張し、Ⅲ区にいたる範囲を３つの調査区に分け、それぞれをⅡ－２区、Ⅱ－３区、Ⅱ－４区とし、人力による表土掘削を進めた。

前年度に引き続き、形象埴輪が配置された位置を復元できるよう、出土した埴輪片を１／10で実測し取り上げた。

遺物の取り上げ後、遺構を５㎝の等高線で表記し、１／20スケールで実測した。

(2) 調査の結果

① 墳端部

Ⅲ区同様大きく攪乱・掘削されていた。現状の墳端より１ｍ程度広がった箇所に10㎝程度の段差があるので、あるいはここが墳端部になるかもしれない。全体図作成後、検討する必要がある。

② ブリッジ

Ⅱ－２区で外堤から後円部方向へ周溝掘削時の掘り残し箇所があった。墳丘へ渡る土橋の可能性が高い。

検出面での幅約２ｍ、深さ約50㎝で、両側を円く掘削している。掘り込み部には埴輪片が出土し、特に北側で鹿形埴輪の頭部、および人物埴輪の男性器が検出できた。

③ 周　溝

Ⅱ－２～４区は畑として長年使用されていたため、調査区全体に幅掘りのトレンチャーが東西方向に等間隔で掘削されていた。

周溝内も同様に表土下50㎝が耕作土化していたが、Ⅱ－３区から南は埋土が良好に保存されていたため、埴輪片が多く出土している。

周溝掘方は全体に荒く、特にⅡ－３区は深さ1.5ｍに及ぶ。その埋土は堅くしまった地山の塊が多いため、周溝掘削時の残土を被覆調整して整地したものと考えられる。

④ 外　堤

全面がトレンチャーによって攪乱されており、表土から30㎝程度がすでに掘削されている。したがってⅢ区とは異なり、アカホヤ火山灰層は消失している。

Ⅱ－４区の南３ｍからⅢ区までには、外堤外を区画する溝状遺構が認められるが、それより北にはわずかな窪みがあるにすぎない。外堤を意識した掘り込みがあったと推定できるが、全周するものか判断できない。

⑤ 埴　輪

周溝内の外堤側と墳丘側から出土している。畑地として使用され、耕作が深耕されているため、埋土中の埴輪の多くが攪乱されたと推定される。しかしⅡ－２～４区まで、ほぼ全面に外堤から転落した形象埴輪があるため、外堤上には後円部側から前方部側まで続く30ｍ以上の形象埴輪配列があったと推定される。

2．百足塚古墳の形象埴輪の整理

Ⅲ区の形象埴輪を現在整理作業中である。その概数は家５体、人物15体、鳥４体、柵15体である。形状不明の個体も多いため、整理整理作業を継続しているが、一部復元のできている個体は下記のとおりである。

(1) 柵形埴輪（図５－１）

高さ36cmで、底部は長径30cm・短径19cmの楕円形を呈する。口縁は鋸歯状の三角形の連続で表現される。外面は一次調整タテハケのち、口縁部を連続鋸歯状に切り込み、底部と口縁直下に突帯を貼付け、側面に透孔を開けている。内面は丁寧なナデで粘土継ぎ目を消している。外面には赤色顔料が遺存するため、全面にわたって赤色顔料を塗布していたようだ。

柵はこのほか少なくとも14個体が認められ、いずれもⅢ区の外堤外側に並んで転落しており、周溝内では検出されていない。おそらく他の形象埴輪配列を囲う意識のもと、製作・配置されたのだろう。

同様の形態の埴輪は前期の奈良県櫛山古墳や中期の東京都野毛大塚古墳など数例ある。

(2) 鳥形埴輪（図５－２）

高さ40cm、顔から尾までの幅44.5cmを測る。底部は歪んだ楕円形で、長径18cm、短径15cmを測る。

巻き上げによって成形され、円筒部を成形し、乾燥させたのち、頚部と尾部を成形したものと推測される。

顔には径７mmの穿孔で目を、径2.5cmの粘土円盤で耳袋を表現する。鶏冠はなく、眉間に長さ６cmの線刻が縦方向に施されている。

尾は空洞で解放した表現で、端部をナデで丸く仕上げる。

円筒部の上下には突帯は貼付けされ、その中間に水平方向に添付されたヒレ状突起がある。おそらく止まり木の表現が退化したものだろう。

鳥にはこのほか３体あり、この個体を含め鶏冠があるもの２体、ないものが２体ある。鶏冠の有無で雌雄を造り分けた可能性が高い。

(3) 人物埴輪（写真図版３）

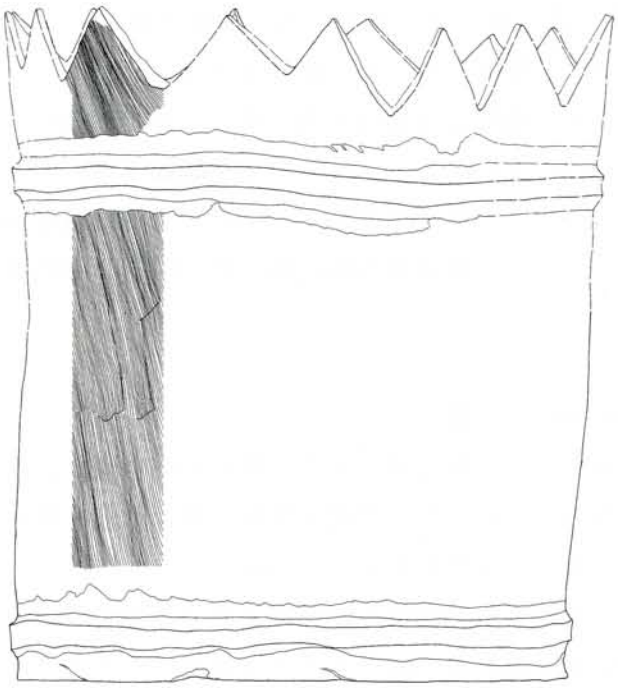
高さ93cm、円筒部上に２本の足を表現した立位の女性埴輪である。上衣を装着し、肩にタスキを掛け、首に玉飾りを付けている。

頭部は粘土積み上げ後、全体をつぶし島田でふたをした成形である。頚部は貼付けではなく不明瞭な稜線となっている。

腕は上腕部までを中空とし、下腕以下を中実としている。左腕は未検出で失われているが、右腕は下に延び上衣の裾をつかんでいる。

２本の脚部の股間には女性器が表現され、周囲には赤色顔料が塗布されている。

ちょうど右腕で裾をめくり性器を露出した造形を表現した特異な女性埴輪といえよう。



1 柵形埴輪

2 .鳥形埴輪

第5図　形象埴輪（1/4）

3．祇園原古墳群の円筒埴輪

宮崎県には総数169基の前方後円墳がある一方、埴輪を採用する古墳は43基が確認されるにすぎず、今後もその数が飛躍的に増える可能性は少ない。

そのなかにあって祇園原古墳群は埴輪採用墳が多いことで以前から知られていた。

発掘調査が少ない祇園原古墳群にとって、その築造過程を理解する上で円筒埴輪は重要資料である。以下では、これまでの墳丘測量等で表採できた円筒埴輪を紹介し、その位置付けを整理する、埴輪の確認できる古墳は前方後円墳５基、円墳２基の総数７基である。

(1) 資料紹介

① 大久保塚古墳（新田原92号墳）

古墳群の最北端に位置する前方後円墳である。墳長85ｍを測り、後円部・前方部ともに三段築成で、クビレ部に造出しを有する。平成５年度に墳丘測量を行い、その際に表採された埴輪は既に『宮崎考古』第14号で資料紹介している[9]。

採取された埴輪片は、色調から赤褐色とベージュ色の２種の円筒の存在が認められ、いずれも有黒斑である。口縁部は薄い直口縁のタイプと貼付けのタイプがある。外面調整はハケメの観察できる個体はなく、２次調整としてナデを加えている可能性が高い。タガは１cm以上の突出を有し、シャープな個体が多い。透孔は宝珠形で割合大きく施す。底部調整はみられない。

体部片が多く、いずれも正確な径を求め得る資料ではない。少なくとも30cm内外の中型品であろう。

② 新田原59号墳

百足塚古墳の北東台地上にある前方後円墳で、墳長約70ｍ、後円部・前方部いずれも２段築成である。平成９年度の墳丘測量調査に際して採集した資料で底部片２点である。

底径はいずれも20cm内外である。図６－13は外面１次調整ののちナデを施し、突帯を貼付している。図６－13、同－14ともに板状工具によって基底部の成形を行っている。

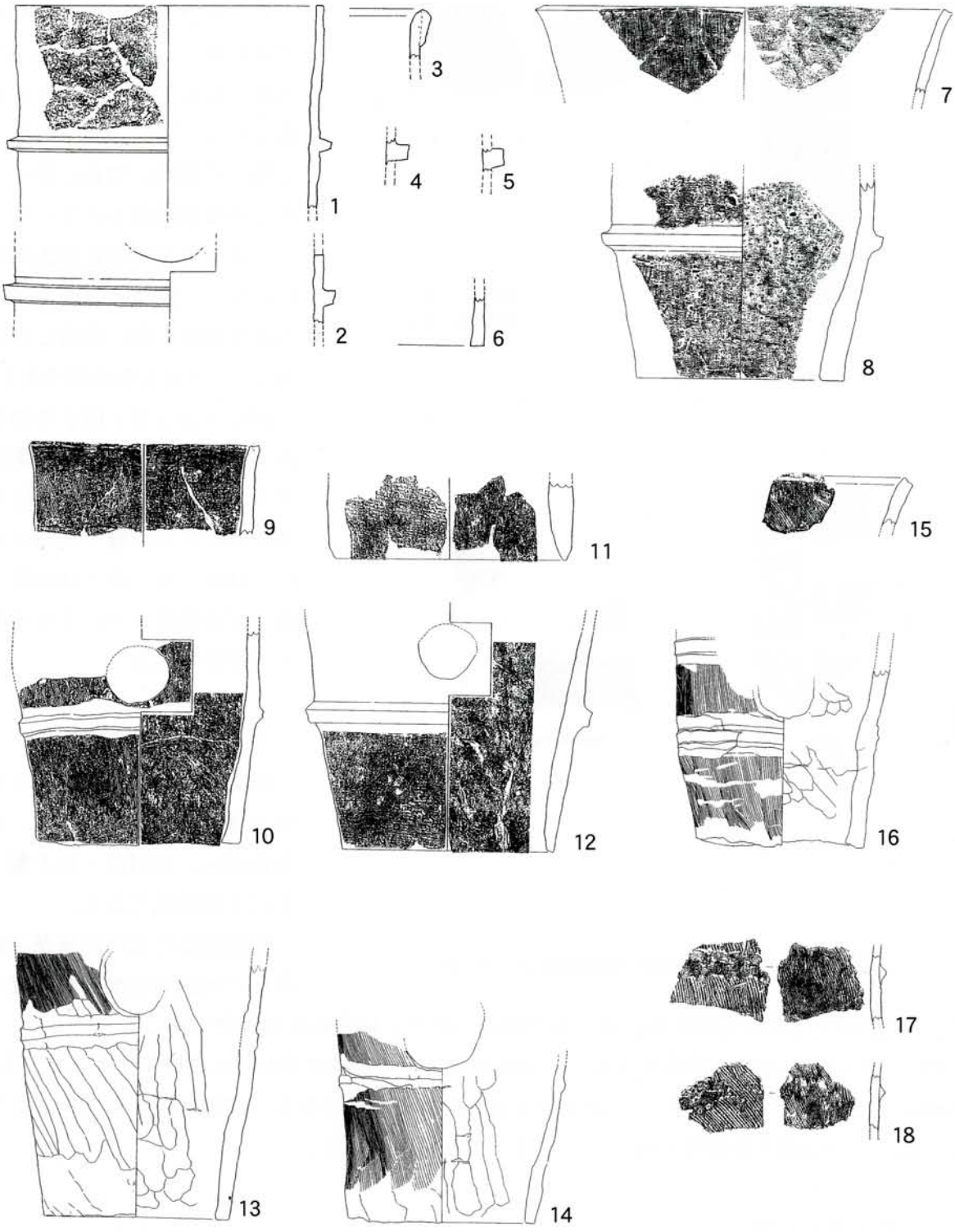
突帯は断面三角形から低いM字形が多く、突出度が低い。

図６－13と同－14では基底部の高さが異なる。透孔は楕円形を呈し、大きいのが特徴である。

③ 百足塚古墳（新田原58号墳）

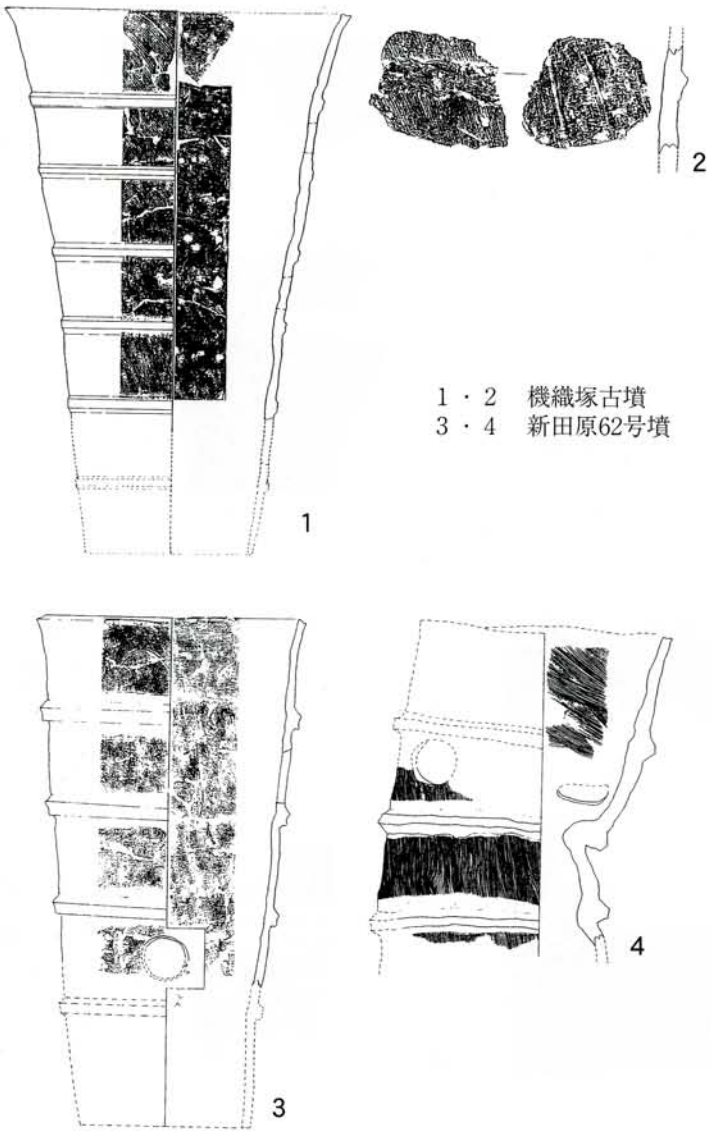
平成６年度の墳丘測量調査時に採取した個体で、基底部３点、口縁部１点である。『新富町文化財調査報告書』第16集で報告した[10]。

底部は20cmを中心に25cm内外の個体が多い。外面は１次タテハケのみで、黒斑は認められない。図６－10以外には基底部成形が認められ、板状工具による押さえが施される。図６－11は須恵質で分厚い造りになっている。



1～6　大久保塚古墳，7・8　新田原61号墳，9～12　百足塚古墳，
13・14　新田原59号墳，15～18　水神塚古墳

第6図　祇園原古墳群の円筒埴輪①　(1/6)



第７図　祇園原古墳群の円筒埴輪②　(1/8)

④　新田原56号墳

百足塚古墳の南西にある前方後円墳で、墳長約50m、後円部・前方部いずれも２段築成である。平成４年度の調査で墳丘の周囲に墳丘に沿って巡る周堀が確認されている。

平成９年度の墳丘実査の際に採取した資料と平成４年度の試掘調査の際に検出した資料で、いずれも無黒斑である。

図６－16は第１段までの個体で径20cmを測る。１次調整タテハケののちタガを添付するが貼付けが粗雑で突出も低い。図６－17、同－18は最下段タガを断続ナデによって施した資料である。

⑤　新田原47号墳

祇園原古墳群中で東側に単独立地した前方後円墳で、墳長約50m、後円部・前方部ともに２段築成である。

試掘調査で後円部端部に転落した状態で検出された資料で、『新富町文化財調査報告書』第17集で報告した[11]。いずれも無黒斑である。

図７－１は６条突帯７段構成を呈し、透孔が２・４・５段にそれぞれ２個穿孔されている。外面は一次調整タテハケのみで、底部径は20cm内外の個体である。突帯は低いM字形を呈する。図７－２は最下段突帯が断続ナデによって施されている。

⑥　新田原61号墳

59号墳の北にある直径約10mの円墳である。平成８年度の試掘調査で確認した資料で、周溝内から出土した。いずれも無黒斑である。

図６－７は口縁部、図６－８は基底部である。いずれも外面一次調整をタテハケで施している。基底部は底部調整が施されてない分厚い造りである。

⑦　新田原62号墳

百足塚古墳に近接する直径約10mの円墳である。平成６年度の試掘調査で検出でき、『新富町文化財調査報告書』第17集に掲載した[12]。いずれも無黒斑で、百足塚古墳の資料に近似する。

図７－３は４条突帯５段構成を呈する。底部径は20cm程度、外面一次調整タテハケで口縁部直下にヘラ記号を施す。透孔を２段・４段にそれぞれ２個ずつ穿孔してある。

図７－４は同じく４条５段構成を呈する須恵質の円筒である。図７－３と同様、外面１次調整タテハケを施し、基底部は板押さえを施す。

(2)　小　結

以上資料の各部の特徴を属性で分類すると表４のようになる。

既に述べたように、日向地方では女狭穂塚古墳の造営にともなって定形化した埴輪製作が始まったと考えられる。大久保塚古墳の埴輪は透孔や突帯の形状が女狭穂塚古墳やその周辺の古墳の埴輪に類似することから、ほぼ同時期の製作と考えられる。大久保塚古墳の埴輪は祇園原古墳群における埴輪樹立の開始期のものである。

ほかの６基の埴輪はすべて無黒斑で外面１次調整タテハケのみの個体である。

突帯の形状から変化の方向性を推測すると、百足塚古墳・62号墳→61号墳・59号墳→水神塚古墳→機織塚古墳、という順番で製作されたと考えられる。

しかし、先で述べたように、祇園原古墳群では、６世紀に継続して12基の前方後円墳が築造されたから、同時期に２系列の首長墓が築造された可能性が高い。とすると百足塚古墳の系列と水神塚古墳の系列は同時期の可能性もある。したがって、突帯の形状は工人集団の別を示すかもしれない。今後の調査によって埴輪以外による古墳の時期比定を行いたい。

表４　祇園原古墳群の円筒埴輪属性分類表

	外面調整		口縁形状			突帯の形状							基底成形	透孔		黒斑
	1次タテハケ	2次ナデ	直上	貼付	摘出	高鋭	細鋭	高台	台形	高M	低M	断続		宝珠	円	
大久保塚古墳	○	○	●	●	－	●	●	●					－	●		●
百足塚古墳	●	－	－	－	●				●	●			●	－	●	－
新田原59号墳	●	－	－	－	●					●	●		●	－	●	－
新田原62号墳	●	－	－	－	●				●	●			●	－	●	－
新田原61号墳	●	－	－	－	●				●	●			●	－	●	－
水神塚古墳	●	－	－	－	●						●	●	●	－	●	－
機織塚古墳	●	－	－	－	●						●	●	●	－	●	－

4．伝新田原52号墳の単龍環頭

(1) 調査の経緯

本資料は既に『宮崎県史』資料編考古２で公表されていたが[13]、環上に表現される龍体の表現などの補足図化が必要と判断されたため、本年度の調査の一環として実測・撮影を行った。

柄頭は祇園原（ぎおんばる）古墳群が所在する児湯郡新富町大字新田（にゅうた）字祇園原地区の方が所蔵している。氏によると、太平洋戦争末期に本土決戦を想定した日本陸軍が、町内の高台に高射台を設置することが多く、52号墳の墳頂にも高射台を設置するために掘削作業を行ったらしい。この環頭はその際に出土したもので、関係者が宿代の代わりに氏宅に寄贈したものという。実際、新田原52号墳の後円部頂と前方部頂には、それぞれに径４ｍ、径２ｍの土壙が掘削されており、これらが戦時中の掘削痕跡と想定される。

前方後円墳における調査例が少ない本古墳群において、主体部からの出土遺物としては唯一の資料である。

(2) 52号墳の概要

新田原52号墳は現状で、墳長約55ｍ、後円部径約30ｍ、前方部幅約30ｍ、後前高差－0.3ｍをはかる前方後円墳である。葺石・埴輪は認められず、平成２年度の試掘調査で墳丘に沿ってめぐる周堀が確認されている。先述のように祇園原古墳群では、前方後円墳14基のうち５基から円筒埴輪が表採されており、うち１基以外は川西編年Ｖ期の特徴を有する。52号墳は内部主体が不明なため正確な築造年代が判然としないが、埴輪を採用しない点から、６世紀後半に築造されたものと推測される。

(3) 環頭の形状

柄頭は全体に緑青が目立つが、環に金色が散見できる。一部に金箔の剥離部があるため、銅製の金被せであることがわかる。幅7.25㎝、長さ8.4㎝、厚さ1.0㎝、単龍環頭としてはおおぶりである。

環体は断面カマボコ形で、その表面には反時計方向に回旋する走龍文がある。この走龍文は２匹の龍が互いに交差する肢体を表現しており、頭部表現の退化や鱗の有無、脚の表現の退化などから環頭の製作時期比定が可能である。新田原52号環頭の場合、２匹の龍のうちの１つは錆化が激しく判然としないが、いま一つが頭部とわかる。しかし冠毛や顎はあるものの耳や舌の表現が退化し、かろうじて龍頭と判断できる程度である。龍の鱗は表現されていない。脚は３本の指をそれぞれ表現しているが、尾は片方で体部と切断したように表現されている。おそらく製作者は環上に表現すべき龍を十分に理解していなかったと思われる。

柄頭の茎はやや短く、目釘穴が縦に２つ開けられている。茎の表裏面には茎部を挟みこんだ鉄が遺存している。

環内の龍は下顎と舌、後毛、そして中央の冠毛が欠損している。眼の上には佩表から佩裏に径2.5㎜の窪みがある。

第８図　伝新田原52号墳出土の単龍環頭　(1/1)

単龍・単鳳環頭は穴沢咏光氏の集成によれば、列島に116例が認められ、氏によって４段階の編年観が提示されている[14]。新田原52号刀は①環上の走龍文が退化し鱗も表現されないこと、②単龍環としては大きい造りであることから、穴沢氏の３段階にあたる製品で、須恵器のＴＫ43型式併行期の製品と考えられる。なお穴沢氏は、この種の環頭は型式変化が早いため、鑞型を使用した列島内での製品と推定し、これらを系列群として把握している。新田

原52号刀は「海王山系列」に該当し、退化していないものに福岡県前原市古賀崎古墳例がある。

(4) 小　結

県内における環頭大刀はこれまで7例の出土が確認されている。ほとんどの資料は出土状況が不明確だが、いずれも6世紀後半以降の地域の小首長墓に副葬される例が多いようだ。伝新田原52号墳出土単龍環頭とほぼ同時期の資料としては串間市崎田の単龍環頭がある。今後も古墳群の基礎資料を補足調査していきたい。

Ⅳ. まとめ

古墳時代後期に築造された祇園原古墳群は、これまでほとんど未調査であった。今回の調査では百足塚古墳の形象埴輪の状況を追加調査し、昨年度来から出土している形象埴輪の整理が進んできている。

本年度の調査でもコンテナ100箱以上の形象埴輪片が出土したため、今後の整理作業を急ぎたい。

また古墳群全体では、円筒埴輪の整理・伝新田原52号墳の環頭大刀の調査など、未解明であった基礎資料の整備も進んできた。さらに散逸した資料の追跡調査を行っていきたい。

【注】

(1) 宮崎県　『宮崎県史叢書　宮崎県前方後円墳集成』1997
(2) 柳沢一男「日向の古墳時代前期首長墓系譜とその消長」『宮崎県史研究』第14号　1995
(3) 岸本直文「前方後円墳築造規格の系列」『考古学研究』第39巻2号　1992
(4) 高橋克壽「西都原171号墳の埴輪」『宮崎県史』第7号　1994
(5) 有馬義人「町内遺跡16」『新富町文化財調査報告書』第29集新富町教育委員会　2000
(6) 有馬義人「新田原古墳群」『宮崎県史叢書宮崎県前方後円墳集成』宮崎県　1997
(7) 藤本貴仁「宮崎平野部の群集墳」『宮崎考古』第16号　1998
(8) 文化財保存計画協会編　『新田原古墳群史跡整備基本計画書』新富町教育委員会　1996
(9) 有馬義人「大久保塚古墳・児屋根塚古墳の円筒埴輪」『宮崎考古』第14号　1995
(10) 有田辰美「新田原58号墳」『新富町文化財調査報告書』第16集新富町教育委員会
(11) 有田辰美「新田原47号墳」『新富町文化財調査報告書』第17集新富町教育委員会
(12) 有田辰美「新田原62号墳」『新富町文化財調査報告書』第17集新富町教育委員会
(13) 有田辰美「新田原古墳群」『宮崎県史』資料編考古2宮崎県　1992
(14) 穴沢味光・馬目順一「単龍・単凰環頭の編年と系列－福島県伊達郡保原町愛宕山古墳の単龍環頭に寄せて－」『福島考古』第30号福島考古学会　1985

報　告　書　抄　録

ふりがな	ぎおんばるこふんぐん3
書名	祇園原古墳群3
副書名	国指定史跡「新田原古墳群」史跡整備にともなう発掘調査概要報告書(3)
巻次	3
シリーズ名	新富町文化財調査報告書
シリーズ番号	第30集
編集者名	有馬　義人
編集機関	新富町教育委員会
所在地	宮崎県児湯郡新富町大字上富田7491番地
発行年月日	２０００年　３月31日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号			
百足塚古墳	大字新田字東俣	47	1001	990801	1,590㎡	史跡整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
百足塚古墳	古墳	古墳時代	周溝	須恵器・土師器 円筒埴輪・形象埴輪	消滅墳の周溝

新富町文化財調査報告書　第30集

祇園原古墳群 3

発行年月日　２０００年３月
発　　行　宮崎県新富町教育委員会
印　　刷　㈱印刷センタークロダ